

# とうきょうと でんとうこうげいひん でんとうこうげいし 東京都の伝統工芸品・伝統工芸士について

〇〇小学校 〇年〇組 伝統 太郎

## とうきょうと でんとうこうげいひん なん 東京都の伝統工芸品って何だろう？

①ほとんど機械を使わず、手作業で作られる。

②100年以上前から変わらない作り方で作られる。

③100年以上前から変わらない材料で作られる。

④東京都内で一定の数の人々が作り続けている。

①～④の全てを満たし、東京都知事が指定したものをいいます。

げんざい ひんもく とうきょうとでんとうこうげいひん してい  
現在、40品目が東京都伝統工芸品に指定されています。

とうきょうとでんとうこうげいひん でんとう つ  
東京都伝統工芸品には、伝統マークが付いています。



でんとう  
伝統マーク

## とうきょうとでんとうこうげいし ひと 「東京都伝統工芸士」ってどんな人たちなんだろう？

①東京都伝統工芸品を15年以上作り続けている。

②伝統工芸品を作るための高い技術をもっている。

③伝統工芸品産業が世の中に広まるための活動をしている。

①～③の全てを満たし、東京都知事が認定した人たちをいいます。

へいせい ねん がつついたちげんざい めい かたがた とうきょうとでんとう  
平成29年4月1日現在、286名の方々が東京都伝統

こうげいし にんてい う  
工芸士として認定を受けています。

とうきょうと でんとうこうげいひん  
**東京都の伝統工芸品ってどんなものがあるんだろう？**

とうきょうと でんとうこうげいひん ひんもく してい  
 東京都の伝統工芸品は、40品目が指定されています。

- |           |           |              |
|-----------|-----------|--------------|
| ① 村山大島 紬  | ⑮ 江戸象牙    | ⑳ 東京彫金       |
| ② 東京染小紋   | ⑯ 江戸指物    | ㉑ 東京打刃物      |
| ③ 本場黄八丈   | ⑰ 江戸簾     | ⑳ 江戸表具       |
| ④ 江戸木目込人形 | ⑱ 江戸更紗    | ㉒ 東京三味線      |
| ⑤ 東京銀器    | ㉑ 東京本染ゆかた | ㉓ 江戸筆        |
| ⑥ 東京手描友禅  | ㉒ 江戸和竿    | ㉔ 東京無地染      |
| ⑦ 多摩織     | ㉓ 江戸衣裳着人形 | ㉕ 東京琴        |
| ⑧ 東京くみひも  | ㉔ 江戸切り子   | ㉖ 江戸からかみ     |
| ⑨ 江戸漆器    | ㉕ 江戸押絵羽子板 | ㉗ 江戸木版画      |
| ⑩ 江戸鼈甲    | ㉖ 江戸甲冑    | ㉘ 東京七宝       |
| ⑪ 江戸刷毛    | ㉗ 東京籐工芸   | ㉙ 東京手植ブラシ    |
| ⑫ 東京仏壇    | ㉘ 江戸刺繍    | ㉚ 江戸硝子       |
| ⑬ 江戸つまみ 簪 | ㉙ 江戸木彫刻   | ㉛ 江戸てがきちょうちん |
| ⑭ 東京額縁    |           |              |

(平成29年8月1日現在。順番は指定順。)



とうきょうしつぽう  
 東京七宝



とうきょうそめこもん  
 東京染小紋



えどひょうく  
 江戸表具

とうきょうと でんとうこうげいひん  
東京都の伝統工芸品ってどんなものがあるんだろう？



とうきょうそめこもん  
東京染小紋

えどじだい ぶし き かみしも こま もんよう そ  
江戸時代、武士が着る 袴 には細かい紋様が染めら  
れるようになり、やがて大名ごとに決まった紋様が使  
われるようになりました。大名の武家屋敷が江戸に集  
まったことで、江戸での小紋の需要が高まり、やがて  
ちょうにん ひろ  
町人にも広まっていきました。



えどきめこみにんぎょう  
江戸木目込人形

とうそ きり こな のり ねんど つく どうたい  
桐塑（桐の粉と糊でできた粘土）で作った胴体に、  
いしろう き ぬの きめこ のり は つ  
衣装を着ているように布を木目込んで（糊で貼り付け  
て）作ります。京都の木目込人形がふくよかな顔立ち  
なのに対し、江戸木目込人形は細めではっきりした顔  
だ  
立ちです。



とうきょうぎんぎ  
東京銀器

えどじだい かくだいみょう ぜんこく あつ えど おお  
江戸時代、各大名が全国から集まった江戸には、多  
くの職人が集まってきました。銀師と呼ばれた銀器  
しよくにん あつ しろがねし ぎんぎ  
職人や、くしゃかんざし、神輿金具を作る飾り職人が  
とうきょうぎんぎ きそ きす  
東京銀器の基礎を築きました。



とうきょうてがきゆうぜん  
東京手描友禅

ゆうぜんぞめ ねん きょうと みやざきゆうぜんさい はじ  
友禅染は1680年ごろに京都で宮崎友禅齋が始めた  
といわれています。さんきんこうたい かくち しょくにん  
参勤交代により各地から職人が  
えど うつ はってん  
江戸へ移り、発展していきました。

とうきょうてがきゆうぜん こうそう したえ いとめのり お いろさ  
東京手描友禅は、構想・下絵・糸目糊置き・色挿し  
など、ひとり さぎょう とくちょう  
など、ほぼ一人で作業するのが特徴です。



たまおり  
多摩織

くわ みやこ よ はちおうじ あきかわ あさかわ せいりゅう  
「桑の都」と呼ばれた八王子は、秋川・浅川の清流  
かこ ふる ようさん さか さまざま おりもの お  
に囲まれ、古くから養蚕が盛んで様々な織物が織られ  
てきました。こんにち おめしおり ふうつうおり つむぎおり  
今日では御召織・風通織・紬織・もじり  
おり かわ つづり そうしょう たまおり  
織・変り綴の総称を多摩織といいます。



とうきょう  
東京くみひも

ぶっきょう でんらい きょう まきもの けさ きそく  
仏教の伝来とともにお経の巻物や袈裟、貴族の  
れいふく ぶし たいとう かぶと よろい かたな つかまき はばひろ  
礼服、武士の台頭により兜や鎧、刀の柄巻など幅広  
つか  
く使われてきました。えどじだいこうき じょせい おび  
江戸時代後期には、女性の帯じ  
めとしても使われるようになりました。



えどべっこう  
江戸鼈甲

ざいりょう 材料であるタイマイの甲羅を2～3枚、水と熱で張り合わせます。この時の湿らせ方・温度・圧力によって善し悪しが決まるとされ、職人の長年の年季と熟練の技がものをいうところでは



えどつまみ かんざし  
江戸つまみ簪

小さな布きれを“つまんで”折り、組み合わせることとで花や鳥などに仕立てることから、つまみ簪という名前が付けました。江戸時代末期の浮世絵や、当時の百科事典に、つまみ簪と考えられる描写が見られます。



えどそうげ  
江戸象牙

江戸時代、江戸の町人に茶道や音楽などが広く普及し、町人文化が大きく発展していきました。象牙は茶匙・茶蓋、三味線撥や髪飾りなどの材料として使われ、象牙製品は町人を含め広く愛用されました。



えどさしもの  
江戸指物

ものさ<sup>い</sup>で板の寸法を測り、釘<sup>つか</sup>を使わずにつく<sup>ひ</sup>り、引き出<sup>だ</sup>  
しのある箱物類<sup>はこものるい</sup>を「指物<sup>さしもの</sup>」といいます。

きょうと<sup>さしもの</sup>の指物は、朝廷<sup>ちやうてい</sup>・公家<sup>くげ</sup>・茶道用<sup>さどうよう</sup>のものがつく<sup>つく</sup>  
たの<sup>たい</sup>に<sup>え</sup>対し、江戸指物<sup>えどさしもの</sup>は、武家<sup>ぶげ</sup>・商人<sup>しょうにん</sup>・歌舞伎役者用<sup>かぶきやくしゃよう</sup>  
のものが<sup>おお</sup>多く<sup>つく</sup>作られました。



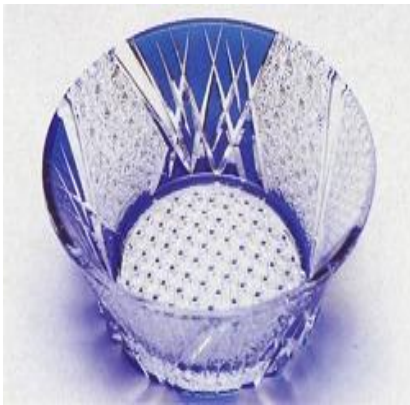
えどさらさ  
江戸更紗

えどさらさ<sup>えどじだいちゆうき</sup>は、江戸時代中期から末期<sup>まつき</sup>にかけ発展<sup>はってん</sup>しま  
した。神田川<sup>かんだがわ</sup>をはじめとする東京<sup>とうきょう</sup>の水には鉄分<sup>みず</sup>が多く<sup>てつぶん</sup>  
多く<sup>おお</sup>含まれ、鉄<sup>てつ</sup>と染料<sup>せんりょう</sup>が化学反応<sup>かがくはんのう</sup>をおこし、独特<sup>どくとく</sup>の渋い色<sup>しぶいろ</sup>  
に<sup>そ</sup>染め<sup>あ</sup>上がります。



とうきょうほんそ  
東京本染めゆかた

かぶきじゅうはちばん<sup>すけろく</sup>の1つ「助六」では、かんぺら門兵衛<sup>もんべえ</sup>  
がゆかた<sup>すがた</sup>姿<sup>とうじょう</sup>で登場<sup>うきよえ</sup>します。また、浮世絵<sup>うきよえ</sup>にもゆかた  
を<sup>き</sup>着た美人画<sup>びじんが</sup>が多く描<sup>おお</sup>かれ、ゆかたは「粋<sup>いき</sup>」を大切<sup>たいせつ</sup>に  
する江戸っ子<sup>えどこ</sup>により、進化<sup>しんか</sup>していきました。



えどきりこ  
江戸切子

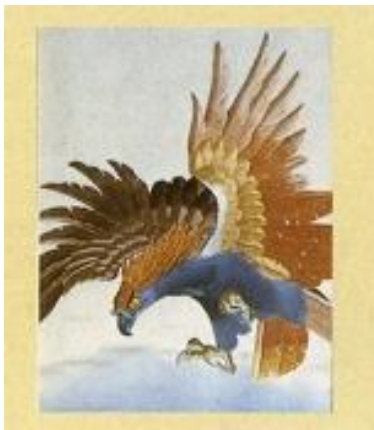
えどきりこ そうししゃ かが やきゅうべえ  
江戸切子の創始者とされる加賀屋久兵衛は、ガラス

せいぞう さか おおさか しゅぎょう いま にほんばしおおでんま  
製造が盛んだった大阪で修業し、今の日本橋大伝馬

ちょう かがみ めがね あつか みせ ひら げんざい えど  
町で鏡や眼鏡を扱う店を開きました。現在、江戸

きりこ こうじょう こうとうく すみたく く おお あつ  
切子の工場は、江東区と墨田区の2区に多くが集まっ

ています。



えどししゅう  
江戸刺繍

えどちょうにん ゆた なか ごうか きもの もと  
江戸町人が豊かになる中、より豪華な着物を求め、

せんしよくぎじゆつ ししゅう はったつ にほんししゅう  
染色技術や刺繍が発達していきました。日本刺繍に

えどふう きょうふう かがふう えどふう こうかん  
は、江戸風・京風・加賀風がありますが、江戸風は空間

たの ししゅう とくちょう  
を楽しむような刺繍をするのが特徴です。



とうきょうちょうきん  
東京彫金

えどじだい かたな よろい ぶく かざ  
江戸時代までは刀や鎧など、武具の飾りに使われ

ましたが、えどじだい きんこうし よこやそうみん  
江戸時代になると金工師の横谷宗珉が、

ちょうみん まじ なか まちほり よ さくふう う  
町民との交わりの中で“町彫”と呼ばれる作風を生み

だ きせる ちょうにん つか どうぐ ちょうきん つか  
出し、煙管など町人が使う道具にも彫金が使われる

ようになりました。



とうきょううちものはもの  
東京打刃物

1603年に徳川家康が江戸幕府を開くと、日本全国から多くの職人が江戸に移ってきました。平和な時代になり刀の需要は減りましたが、鍛冶職人が作る鑿、鉋、包丁、剃刀といった道具は、町人に愛用されました。



えどひょうぐ  
江戸表具

表具とは、紙や布を糊で貼り合わせ、巻物や掛け軸、ふすまなどをつくることをいいます。町人文化が花開く中で茶道や書道・絵画が江戸町人に広く親しまれるようになり、江戸表具が盛んになりました。



とうきょうしゃみせん  
東京三味線

江戸時代には、歌舞伎の長唄・義太夫・常磐津・清元・新内といった邦楽が発展していきました。江戸時代初期の寛永年間には、石村近江といった三味線の名匠が現れ、三味線作りも発達しました。





とうきょう むしぞめ  
東京無地染

むしぞめは、もっとも基本的な染め付けです。江戸時代の染色では、「江戸紫に京鹿の子」と言われ、鹿の子絞りは京都が、紫染は江戸が最上とされ、江戸紫・江戸茶の染物は江戸町民に愛用されました。



とうきょうしっぽう  
東京七宝

江戸時代初期に、東京七宝の始祖である平田彦四郎が渡来人から七宝の技術を学び、幕府お抱えの職人として、刀の鐔など多くの名作を残しました。平田家の技術は門外不出とされました。



えどがらす  
江戸硝子

江戸硝子は、18世紀初めに日本橋で加賀屋久兵衛が鏡や眼鏡を、浅草で上総屋留三郎がかんざしや風鈴を製作したのがはじまりとされます。江戸硝子は昔からの製法で作った硝子をいい、江戸切子は江戸硝子を加工し切子模様をつけたものをいいます



えどてがきちょうちん  
江戸手描提灯

せいきはじ ちょうちん げんけい  
16世紀初めごろに提灯の原型となるものができ、

えどじだい ひろ しょみん つか  
江戸時代になると広く庶民にも使われるようになりま

した。ちょうちん か い もじ えどもじ い  
した。提灯に描き入れる文字は江戸文字と言われ、

じんじゃ てら は せんじゃふだ げんこう ちょうちんしょくにん か  
神社やお寺に貼る千社札は、原稿を提灯職人が描い

ていました。